

小平図書館友の会 会報46号

ネット公開版



発行日 2021年11月15日
 発行者 小平図書館友の会会長 剣持 香世

ブログ <http://yamaoji.cocolog-nifty.com/kltomonokai/>
 Eメール kltomonokai@gmail.com



もくじ

コロナ禍の中で	1
電子出版に関わった経験と電子図書館への期待	2-3
第24回定期総会報告	3
学習会報告 YAを楽しむ会	4
図書館協議会報告	4

コロナ禍の中で・・・

剣持香世

突然降ってわいたコロナ禍。思うような生活ができずになにかしらのモヤモヤをかかえて過ぎられた方は多かったと思います。小平図書館友の会も制限の中での活動を余儀なくされました。顔を見ながらの交流ができなかったため、毎月発行の会員交流紙「らいぶらりーふれんず・こいだいら」上での情報のやり取りに力を注ぎました。好評だったのは「おすすめ本」の紹介です。タイトルに簡単な文章を添えて「こんな本がありますよ」のメッセージを込めました。ここではタイトルのみご紹介しますが、さすが本好き、図書館好き…いろいろなジャンルの本が紹介されています。(交流紙は、ご入会くださいますと、お送りいたします。)

～ おすすめ本リストの一部 (書名・著者・出版社・出版年) ～

『少年と犬』 馳星周 文藝春秋 2020	『大家さんと僕』 (マンガ) 矢部太郎 新潮社 2017
『ワカタケル』 池澤夏樹 日本経済新聞出版 2020	『金春屋ゴメス』 西條奈加 新潮社 2008
『音楽の肖像』 堀内誠一／谷川俊太郎 小学館 2020	『つけ義春日記』 つげ義春 講談社文芸文庫 2020
『きよしこ』 重松清 新潮文庫 2005	『人間の土地へ』 小松由佳 集英社インターナショナル 2020
『東京、はじまる』『家康、江戸を建てる』 門井慶喜 文藝春秋 2020／祥伝社文庫 2018	『東京裏23区』 本橋信宏 大津図書 2019
『泥』 ルイス・サッカー 小学館 2018	『夜と霧 新版』 V・E・フランクル／池田香代子 訳 みすず書房 2002
『のらねこのノー』 原野さき 銀河編集室 2003	『硫黄島の星条旗』 ジェームズ・ブラッドリー／ ロン・パワーズ／島田三蔵 訳 文春文庫 2002
『すぐ死ぬんだから』 内館牧子 講談社 2018	『100万回死んだねこ 覚え違いタイトル集』 福井県立図書館 講談社 2021
『長女たち』 篠田節子 新潮社 2014	
『海と月の迷路』 大沢在昌 毎日新聞社 2013	

ところで図書館の本って「コロナ」大丈夫？ と聞かれることが多かったです。感染に対する考え方は人それぞれですから答えは難しいです。利用者からの要望を受け、中央図書館に紫外線を使った「図書消毒器」が導入される予定ということをお知らせしておきます。

* 小平図書館友の会へのご入会は上記タイトル内の連絡先へ (ブログ参照)

電子出版に関わった経験と 電子図書館への期待 伊藤文代（会員）

私の英語の先生でもあるアメリカ人の友人から誘われて、彼の著書出版に翻訳で参加することになったのは2年前のこと。それから紆余曲折を経て先ごろようやく販売となった。

本を出版したいと聞いて私は、どこの出版社に持ち込むのか、見通しやコネはあるのかと質問したが、それは愚問だった。彼が考えていたのは自費での電子出版だったからだ。後に述べるが、結果として端末などで読める電子書籍の形ではなく、POD出版（ウェブで注文した分だけ印刷して届く）となったが、ここでは広義の意味で電子出版とした。

* 本の内容と出版までの顛末

その本の名前は「THE ELEMENTS OF STYLE 日本人の英作文のために」という。もともと「The ELEMENTS of STYLE」という半世紀前に書かれた本があり、欧米の大学でライティング教材としてよく使われているが、既に著作権は消滅してパブリックドメイン（公有）になっている。その原著の一部をもとに例を示して説明を加えた部分と、著者が日本人に英語を教えてきた経験で知り得た、日本人が間違いやすい表現についても詳しく書かれている。

さて翻訳だが、英文の説明ごとに、即ちその文章の下に日本語訳をつけていく、というのが著者の企画で、中身は英語と日本語が交互に並んだ独特の形態といえる。そして全編にわたって原著にも増して強く貴かれているのは、作文は簡潔明瞭にという主張だ。著者の英文自体も簡潔明瞭で、しかも強い調子を伴っている。翻訳にあたって、当然ながらその著者の主張の強さと文の息遣いはしっかり生かそうと思った。その上で、日本人に分かりやすいように、という著者の意向に沿って訳していくのは、思いのほか難しかった。とは言え、やはり言葉というものに食らいついていく楽しさは独特のもので、しばし時間を忘れて没頭することもあり、それを味わえたことを嬉しく思っている。

そしてひと通り訳し終わったところに著者の加筆訂正が入り、ドロップボックスで原稿を共有しながら、執筆、翻訳、加筆訂正、再度翻訳、訂正の作業が繰り返された。メールもやりとりしながら何度か会って打合せもしたが、それも途中から新型コロナ

ウィルスの感染拡大により、メールとスカイプのみに頼らざるを得なくなった。さらにそれぞれの体調不良、家庭の事情等々から半年近い中断を余儀なくされた時期もある。

それでも原稿を完成させ、著者が考えた表紙デザインをプロに仕上げてもらい、昨年末には、Amazon、Kindle Direct Publishingにアップロードする手前まで至った。ところがファイル変換の問題など、一旦クリアしても再度原稿が崩れるなど、難航した。そうこうするうちに著者が、印税配分や価格設定の縛りなどの条件に疑問を抱き、ハードカバーへのこだわりもあって Amazon からの出版をやめてアメリカノースカロライナ州に本拠を置く自費出版会社 Lulu（ルルエンタープライズ）を使い、POD（プリントオンデマンド）出版とすることにした。

しかしここからがまたトラブルの連続、フォーマット即ち本としての体裁を整える際に、細かいところで齟齬が生じて思うようにいかないなどの問題が発生し、結局当初の予定をはるかに超える期間を経て、ようやくアップロード完了、オンライン上で出版の運びとなった。

いまや、個人の電子出版は容易いと言われる。スマホで簡単とか、1週間できるとのハウツー本が文字通り電子出版されてもいる。一方で代行サービスの業者もある通り、誰にでもどんな場合でも簡単とは言い切れないだろう。しかし誰でも出版のチャンスがあり出版後も在庫のリスクを負うことがない電子出版はやはり魅力で、従来の出版よりハードルがなくなったと言える。自分に合った出版社を見つけ利用すれば困難さもより回避できるだろう。

今回我々の本は電子出版の会社を変更したこともあり、電子端末ですぐアクセスして読める電子書籍ではなく、サイトで購入後に印刷して送られてくるPOD出版で、Luluの関連企業が日本にはないため、日本での印刷は不可能なことからアメリカやイギリスなどで印刷されて船便となる。その結果、日本からの注文では手元に来るまで二、三週間もかかってしまう。これは正直想定外であった。

しかし、著者と私の「こういう本を作って出したい」という思いはなんとか結実して何人かの手に渡っている。7月には読者10人余りと著者と私とでZoom meetingを開催して、有意義で楽しい時を過ごした。出版も購入も、その後のイベントも、すべてお互い自宅で済ませたわけで、予想外のコロナ禍にあって至極適切で自然な流れとなったのも印象深い。

* 電子図書館への期待

こうして今回思いがけず「書いて出版する側」を初めて経験したことで、出版の仕組みや読書の形態など様々広範囲に関心を持った。公共図書館における電子書籍貸出サービス（電子図書館）の現状と課題の一旦も知るに至ったが、今後の進展に期待を寄せたいと思う。

様々な電子書籍の増加は、紙の資料に偏った収集・提供が果たして公平で十分な図書館サービスだろうかという疑問すら投げかけてくる。かつては電子図書館を検討する際に決まってコンテンツの少なさが問題視され、導入は時期尚早とする自治体も多かった。日本では出版界が、紙の本主体のビジネスモデルからの脱却に消極的だったこともその要因のようだ。だが出版界も変化しており、コンテンツ数も年々増加しているという。ただ自治体としては、紙の本の収集所とは異なる、例えばシステムやライセンス購入などを対象とする予算の付け方をはじめ、乗り越えなければならない課題は多い。無料原則と選書基準も改めて議論や確認の対象となりうるだろう。

しかしながら2019年に施行された「視覚障害者等の読書環境の整備の推進に関する法律」、教育現場の電子端末整備とICT活用、昨年来のコロナ禍で求められる非来館型サービスの必要性、これらが変化を押し進めるのは間違いない。既に始まっているこの流れの中で、小平も電子図書を検討していきたいとの図書館からの話が、先日の友の会会員向け交流紙に載っていた。

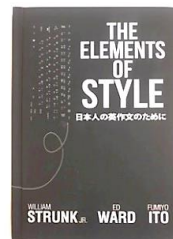
ところで最初に出版の話聞いた際に書店に並ぶ紙の本を思い浮かべた私だが、実は読む側としては、最近は電子書籍を読むことが多くなって、紙の本からやや遠のいている。図書館友の会の会員でありながら、と何やら後ろめたい気持ちにもなるが、コロナ禍以前からして、実はこの数年、私は図書館で本を借りるということをあまりしなくなってしまった。読書の大半がタブレットかスマートフォンによるものになってしまったからだ。

その大きな理由は、一言で言えば「歳を取った」に尽きる。図書館で何冊かの本を借りて、早く読みたいといそいそと家路についた頃が懐かしい。今ではその気持ち自体は変わらないものの、本の重さが手や肩にこたえる。それに、遠視、乱視、老眼が進み、それなりの眼鏡を使用しても、字の細かさや量

に太刀打ちできなくなってきた。その結果、気が付いたら、何冊分でも重さは端末の分だけ、細かい字は簡単に拡大できるという、モバイル端末での電子書籍の読書がほとんどになっている。電車の中でも外出先でも端末さえ持っていれば読書に困らないのも魅力だ。

とは言え、公共図書館で本を借りて読むことの良さも常に頭にある。信頼に足る資料の中から広範囲に探し選べて出費もない。その公共図書館の特性と電子書籍の利便性という双方の良さが結びついて欲しいと願うが、簡単ではないことも充分理解できる。ただ、図書館からやや遠のいてしまったひとりの高齢者として、電子図書館という別のドアから、身近な図書館に戻ってみたいとも思っている。

* この本は小平市図書館に寄贈させていただきました。



THE ELEMENTS OF STYLE
日本人の英作文のために

第24回小平図書館友の会定期総会報告

10月3日に総会を行いました。コロナ感染予防のため、昨年と同じように会員みなさまには事前に議案書をお送りし、議決権行使書にてご判断をいただきました。当日中央図書館視聴覚室には役員、監査、議長（候補）、そして利光良平中央図書館長をお招きして議事を進めました。活動報告、決算、活動計画、予算のすべてが承認されましたことをご報告いたします。総会時会員数130名。（剣持香世）



2021.10.3 第24回総会（中央図書館視聴覚室）



学習会報告

YAを楽しむ会

パソコンの画面を開くと「来てる、来てる」——今月のYAを楽しむ会（YAの会）の様子、来月の課題本、時々それぞれが読んだ本の簡単な紹介、等々。長らく休会していた私に繋がっていたささやかな楽しみの糸でした。YAの会はファンタジーやティーンエイジャー向けのいわゆる児童書を読み合っただけで月に一度集まり、感想を話し合う読書会です。いい年をした大人が、と思うかもしれませんが本の内容は家族のこと、友達のこと、学校のこと部活やサークルのこと歴史を踏まえた冒険、魔法、昔々。今起きている若い世代の様々な問題も年を経た今だからこそ話せる若いころの話もごちゃ混ぜにして読後の感想を世間話のようにおしゃべりして約2時間を過ごします。何よりも児童書に惹かれるのはどんな困難な状況でも必ず最後に救いがあることです。希望の光が見える結末は快い眠りを誘います。

例えば10月の課題本『嵐の守り手 1. 闇の目覚め』はアイルランドに実在するアランモア島を舞台にアイルランド神話をエッセンスに描かれたファンタジーです。今までにアイルランドを舞台にした作品を数々読んできましたが、新しい作家がこのようなお話を作り出していることに感動しています。

（奥村公子）

～2021年6月から2021年10月までのテキスト～

- 6月25日（金）『てのひらに未来』
工藤純子 くもん出版
『女の子はどう生きるか 教えて、上野先生！』
上野千鶴子 岩波ジュニア新書
- 7月16日（金）『疾風の女子マネ』
まはら三桃 小学館
『シャイローがきた夏』
フィリス・レイノルズ・ネイラー あすなろ書房
- 9月24日（金）Zoomで実施
『理不尽ゲーム』サーシャ・フィリペンコ 集英社
『シャイローと歩く秋』
フィリス・レイノルズ・ネイラー あすなろ書房
- 10月22日（金）
『嵐の守り手』 キャサリン・ドイル 評論社
『じりじりの移動図書館』
人気若手作家5人によるリレー小説 講談社

声に出して本を読む会・・・休会中
図書館について学ぶ会・・・休会中
読書サークル・小平・・・休会中

図書館協議会報告

2021年度から、小平市図書館協議会の公募委員になりました。任期2年です。

図書館協議会（以下、図書協）というのは、図書館法第十四条に規定がある組織で、「公立図書館に図書館協議会を置くことができる。図書館の運営に関し館長の諮問に応ずるとともに、図書館の行う図書館奉仕につき、館長に対して意見を述べる機関」です。

委員名は、市報に掲載されており、現在12名。小平市図書館条例第9条によると、委員の構成は、「学校教育及び社会教育の関係者、家庭教育の向上に資する活動を行う者並びに学識経験のある者のうちから教育委員会が任命する」となっています。図書館事業の報告や質疑とともに、協議会独自のテーマで調査研究し、図書館長に提言をすることができます。

図書協については、図書館ホームページの「運営方針」に会議要録がのっています。今年度の事業計画も掲載されていますので、ぜひお読みください。

第1回（7/29）、第2回（9/29）の報告をほんの一部分ですが以下に記載します。

第1回 報告より：新任の図書館協力員は通常の研修（年6回）のほか、新任者研修として3日間の研修を行う。紫外線消毒器を1台購入する。中央図書館に設置予定。

Q：同器は紙を痛めるので設置しないと言っていたが、

A：市民要望もあり、予算もついたので設置することになった。

Q：マンガはいつから入れるのか。

A：7月から、学習漫画を入れていく予定

第2回

Q：利用状況は、減ってきているのか。理由は？

A：ここ10数年にわたって、小平も、他市の館も、貸出数は減少傾向。ただ、入館者数は計測できないので不明。花小金井図書館は入館者数がのびていると思われる。交通の便がよいためか。

Q：ティーンズ委員会は他図書館でもやらないのか。

A：なかまちティーンズ委員会に小平全域からの参加を増やしていく。

意見：第4次子ども読書活動推進計画令和2年度進捗状況に「特別の支援を必要とする子どもへの支援」がある。小平市には多くの大学、多くのNPOがあるので、そういったところと連携協力してはどうか。

（伊藤規子）

